

# 連珠っておもしろい

## 九段 河村典彦

### ●第24回●

#### 以下容易?ではない変化

前回、高川さんに助けもらったが、実は1月末から非常に忙しい状態が続いたため、原稿を送ることが出来なかったのが原因である。というのも、会社の製品がリコールを起こし、その後始末のメンバーに急遽なつてしまったからである。特に1月2月は帰るのが毎日午前様で、ホテルに戻つてからもパソコンを開いていたりで全く連珠のことを考える暇がなかった。

やっていたことはほとんど謝ることばかりで、「申し訳ございません」は挨拶になつてしまった。ただ、貴重な経験をしたということも言える。この経験でわかつたことは、世の中には色んな人がいるということである。怒る人もいれば優し

い言葉をかけてくれる人もいるし、ここぞとばかりに法外な要求を吹っかける人もいる。まあ色んな人がいるからこの世の中が成り立つのであるが、それならもう少し連珠をやる人が多くてもいいのでは?とも思う。やはり大事なものは「知らしめる」ことである。興味を持ってってくれるであろう潜在需要をどうやって掘り起こすかに知恵を絞らなくてはならない。幸い5月以降は多少は落ち着くであろうから、また連珠のことに時間を取れるようになってくるはずである。

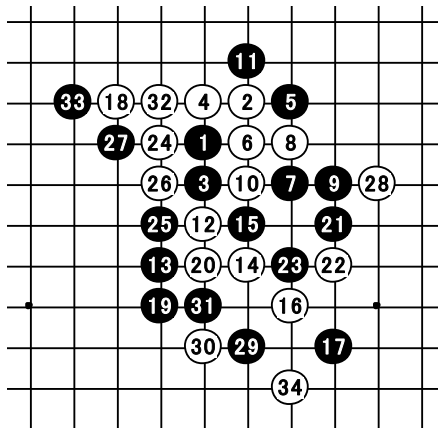
さて、最近では自戦記を含め研究や詰連珠は連珠世界の方に載せていたのであるが、今回はその解説を珠友の方にしてみたい。(これでも相互の読者を増やそうという意図も?)

06年12月号に掲載された特別昇入段テストに出された問題「となりの芝生」

のことである。

この発端は例によってハンゲームである方から、白34の防ぎの時の黒勝ちがわからないということがきっかけであった。

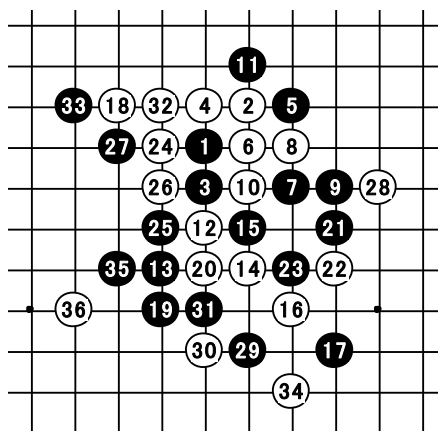
黒29までは斉藤本にも



載っていて、以下勝ちという雰囲気である。しかも以下容易っぽいので、こんな何とかなるだろうという思いで調べてみたが、これがなかなかうまくいかない。白32と伸びるのが粘りのある手で、これによりまだ剣先が生きる形となつてい

る。

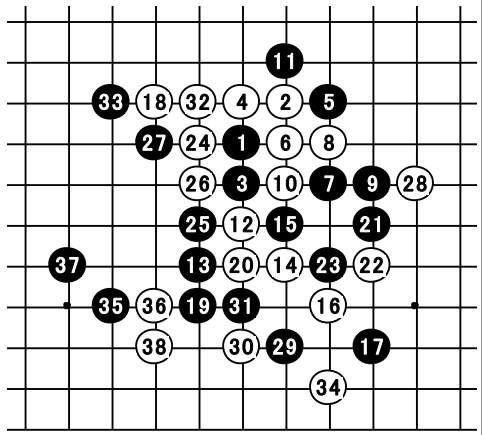
それにしても、これは有名な形だから今まで知られてこなかったのが何とも不思議だ。ともあれ勝ちを出さなくてはいけないから、しばらくは盤と戯れること



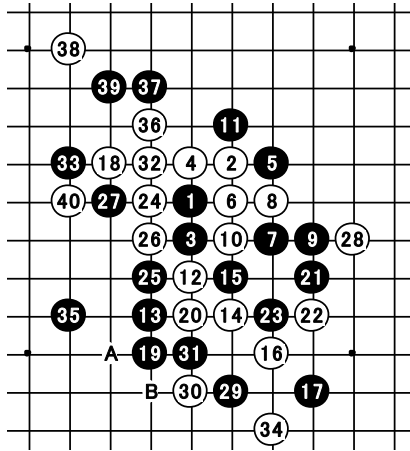
となつた。

まず目に付くのは黒35だが、平凡に白36に止められて案外二の矢がない。

ならばと長連筋を覚悟で黒35、37と引いてみても、黒33の石が邪魔をしてやっぱり勝てない。

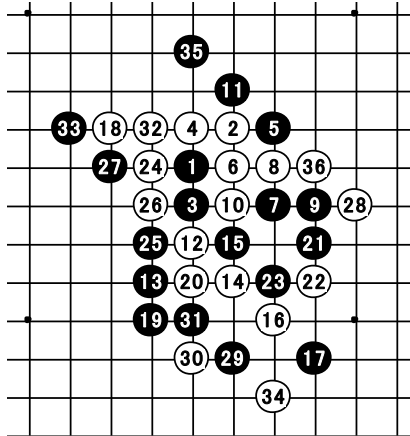


そうこうするうちに、ようやく急所の黒35に気がついた。

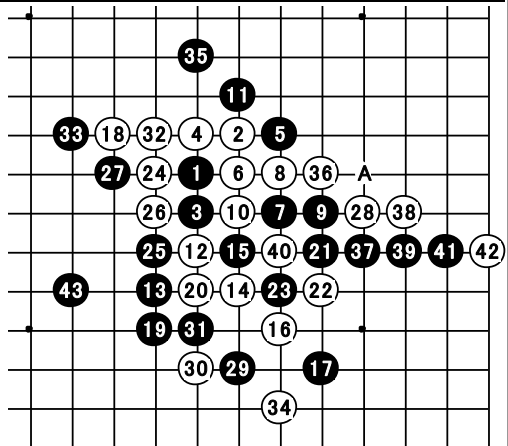


この手は含み手となって

おり、さらにA後Bを狙っていて、絶妙手である。ところが、これには白36と打ち、白40で見事に逆転となる。これは困ったと絶望感に襲われていると、先に黒35に打てることに気がついた。そっかそっかともう一度並べると、何と白36から止められると四追いが残るではないか！

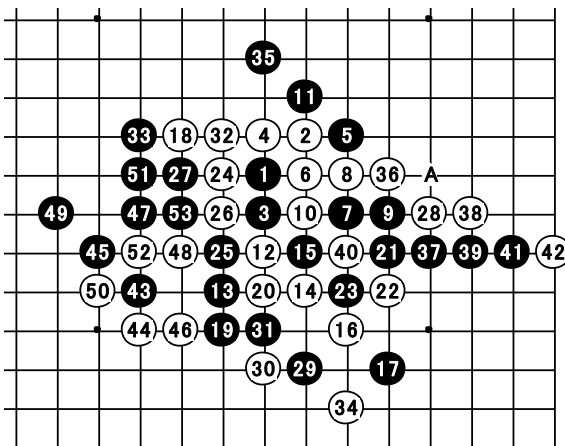


これには参った。どうして勝てないんだろうと諦めかけた時、さらに黒37から止めると下辺に四追いがありそうなることを発見した。ここでもうやく右下の力を



借りることが出来たわけである。右下と全然つながらんなくと思っていたけど、こんな所で役立つとは思わなかった。詰連珠的にはさらに白38と防ぐのが手数を延ばす一着で、黒は2本の四ノビをしないと先手を取れない。ただ実際には白38でAと四ノビをされると四追いがなくなるので、先に37を打っておかなければならない。原案では落選であった。さて、念願の黒43を打つ

た後も仕上げが難しい。白44の後黒45とミせるのがうまく、実戦ならあとは何とかなる、で済ましそうだが詰連珠となると全部研究しなくてはならない。



代表的なのを示したが、黒49と含み手が好手で、これも発見するのに苦労した。詰連珠を作ることは実践での詰めにも役立つはずなので、皆さんぜひ発表してみてくださいか。